

関門を押しひろげられる痛みに、プリンスが泣きそうな声をあげる。

はち切れずに入りこんでくるのが不思議で仕方がなく、挿入している浩司も内心彼女を傷つけないかどうか心配だった。

だがようやく亀頭部分がエウレカのなかに収まり、浩司はホッと胸を撫でおろした。「入ったよ……」

初めて侵入する少女の直腸はヴァギナよりも粘膜は硬かった。先端部分を入れて動かさなくてもペニスを締めつけ、少女の胸の鼓動に合わせてドクドクと脈動している。

「これから動かすけど、いい？」

「……大丈夫。ゆっくりお願い……」

エウレカは閉じた^{まぶた}瞼をうつすらと開きうなずいた。

身体を内側からひろげられる感覚はいまだ苦しかったが、見あげた少年の顔はいつもよりもうつとりとほころんでいるように見える。そんな彼に見つめられたら断ることなんてできなかった。

「じゃあ、いくよ……」

浩司は再び下腹部に力をこめた。

マンダリ返し状態のプリンスを押しつぶすかのように体を前に倒し、肉竿を挿入

していく。強力な締めつけがペニス全体に降り注ぎ、思わず声がもれてしまう。

「……すげえっ……気を抜いたらつぶされそうだ……」

「ぐ……あっ……熱いっ……浩司……」

腸内に沈みこんでいくたびに肉を押しひろげられる苦痛がエウレカを襲う。だがペニスを受けとめたアナルの入り口は少しずつ性感帯を認識しはじめ、深く響くペニスの振動に快感の兆しを感じていた。

「あっ……あああっ……変だ、なんか変っ……」

下腹がぎゅうつと熱を帯びる。膣口はクパツとひろがり、菊穴の代わりにとめどなく蜜を溢れさせつづけている。

やがて浩司の腰がびったりと少女のヒップにくっついた。

「これで全部入った……動かすぞ」

浩司はそう言うとは慎重に腰を引いた。ずるりと音をたてて肉棒が尻のなかから姿を現わし、そして再び少女のなかへと埋もれていく。

「あんっ……はぁん……」

これ以上の拡張はないとわかったエウレカは自然と身体力を抜きはじめていた。
こわば強張った身体がほぐれていけばいくほど、アナルに入りこんだ浩司の分身が動いて

いるのを敏感に感じてしまう。

「んんっ、おなかいっぱい……浩司のが……」

「ああ、俺もすごく感じる」

浩司は未知の腸内での抽送に目を細める。絞り取られるような吸いつきは早くも射精をうながしはじめている。

自然と浩司の腰の動きが速まっていく。

唾液でたつぷりと濡れたアナルはぬちゃぬちゃと音をたてながらペニスを吞みこんでは吐きだし、甘い刺激を与えつつづけてくれた。

「ああっ……浩司っ……浩司いっ……いいよっ……」

両腕で浩司の体を抱きしめエウレカが嬌声きやうせいをあげる。

硬くふくれあがった肉杭が腸内をえぐっていくピストン運動にエウレカはすでに快感しか感じなくなっていた。

引き裂かれるように感じていた痛みよりも、敏感な粘膜は快感を強く感じはじめている。ペニスを引き抜かれるときは排泄はいせつと感覚が似ているとさえ思えるようになった。

「なんかもう……イ……イッちゃいそうなんだ……」

「俺も……一緒にいくぞっ」



ずるりと引き抜くと、再び亀頭を尻穴へとあてがい、再度侵入のために腰を突きだした。浩司が深く振りおろした瞬間、エウレカが全身を震わせる。花びらの間から蜜がほとばしった。

「あっふあっ……あああっ、あああっ!!」

腰骨がヒップに埋もれ、ぎゅつと腸内がざわめく。

ペニスの奥底からマグマのような熱が上がり、粘度の高い精液がアナルの奥へと解き放たれていく。

「くうっ——っ」

大きく脈動をつづけ、尿道は大量の白濁液を吐きだし、少女の腸内を満たしていった。

「ふあ……」

脱力感が襲いかかり、すべてを出しつくした浩司はエウレカからペニスを引き抜くと、そのまま少女の隣りに横たわった。

「はあ……はあ……」

全身で呼吸を繰り返えし、ようやく熱が収まりかけてくるのを感じる。言葉にできない幸福感が二人の体を包みこんでいく。

「エウレカ……ごめんな」

「ああ、ちょっとやりすぎだ……浩司……」

足をおろしエウレカは恨めしそうに浩司を睨みつけるが、すぐに穏やかな表情で微笑むと、もぞもぞと身体をよじらせて浩司の胸に抱きついてきた。

「でも……今、私はすごく幸せなんだ。ありがとう浩司」

「ビザを取ったらすぐに帰ってくるから、それまで待っていてくれよな」

「……うん」

汗で濡れた少女の額をやさしく撫で、浩司はしばしの別れを噛みしめたのだった。